



2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7

集義外書卷十一

中庸九經考

一齊明盛服非禮不勸所以修齊也去奢遠色賤貨而貴德所以勸賢也尊其位重其祿同其好惡所以勸親也官盛任使所以勸大臣也忠信重祿所以勸士也時使薄歛所以勸百姓也日省月試既稟称事所以勸百工也送往迎來嘉善而除不能所以柔遠人也絕世奉廉固治孰持危朝聘以時厚往而薄來所以懷諸侯齊以之思邪而胸中清而不失所為而存乎己而一念所起必有之於心而無以見於外此誠服之禮服

卯七
而存乎己而一念所起必有之於心而無以見於外此誠服之禮服

のやうにと首と足とあとも天地と徳と合て造化と助あるの事
玉子錦とまとうあらもまきの神のまことの御神と服神をもふハ不
の色不西の形と見てゆかんか山の声あらの音と見て御つて山の云あ
のまようと見ゆる山野よ野——山地の難易民の苦勞と
敵陣の法成なり——玉露しありをアキハ病院をもれなま
凡夫の放場よをまめ——わざくらの樂ちうよやう一度ハもくと一度も
りとさく文武の道これらもさうとけ先あしてさうとけするもと用ふる
衣冠の——路自夜もすくはと先路でまき御まぐの氣力すくはりた
礼なあとおはるの御衣冠くまきとて体尊——まくすくの時すく又
名取の四時よ行慶がまほほはあへ歸てひかまくたはまもからう又
其下人さすま刻よもいねを——ゆりをえづりとまくねくらものうれ
喜んで——后女御更衣と青葉花被し——まく白衣うくも
時あふ感——后女御更衣と青葉花被し
庄——あを—— け時も和とやか——精神と喜びしかも天地の和と
助能時をも日向面の聖服うりて時とあく後と御よ那とくされ
又衣冠とそ被樂うりて終ふ時とあく——告事庸の聖よけふと禮と
さく方御能の則し或向左手所アヘの御能のねいとて天地の和と助
能すや云禮ハ天地の筋じ樂よ天地の和し天子あらすと西
事よ能ひもすと則玉トの風俗とぬて人民あらす——故よ天地の
和と助能のを説き遠毛と賀つと用ひの第一の戒し君すハか人の

あよなぬものたま共小人あのきとあてとせぬ買物のあら用もう
と殊の仰つてまくと虚説造立とて一説をちかくすまうもの
あらうするとわざりの有てもあや色の事、或あるものに思ふも假と見と
あひて成能せんとあひて一也とも知力とあひてはあひても
きほりへ小人よみづとて言あらむ。又多知力とあひてはあひても
かねうへ放よ明石と先鋒と退あひて上ゆうふへて感き、
虚説説云あひゆ一も世人と放流されると同ゆうなり
あひて若とさゆるものと放流一々ア圓のあひやのあをて
ウキはこよする人あひゆもとまは肉縫うり説まし又西やのひり
もりてかみ入るのたまは西色の玉の下内里高かまごみゆ
毛糸を引けてぬら絹を重ねてまくとまよあひとぬきのんかき玉るハ
才人諸彦九人と宮女のお室まで告れ御の意様うて自らめのそと
おなまは肉縫とうすも有(きあられ) まわねのりうや
丸腰絶て身角和氣の体よせつら一ぬきの費かむなまじや向ぬ色のんか
才人九人と云うて大なるよきつらて衣服被食是れをば何事ねあ
自らの理しよ一のうみ色あんじき度えもけんも貴族大ふ万事
因多よらうと仰めをや一理よ次賤貨而貴傳、人君の令限薄を
詔書を以て成せり一もあらうとめことうと宣、民のあひやと五穀
ふかへりあらうと令限とまへて六朝とくわくちにあらう

道ある所の風俗を令限を考へる事度とてなほあめぬくとふ難とはうく
おもひてまくらむる軍隊は軍陣より身を離へば飢餓の年令限を
食ふるをもと令限とすとて死へるもの多し。松平主が敵を民
のためまくらむるをもて万のうと名あらむ敵より取らよみ敵うち
してあもられ、軍もともかの令限をもつては生れりと食あつと令限と
まくらむるをもくらむる令限をもつては食あつと令限と
軍あらむ令限をもとまくねあらなく飢餓は、民人多城死ぬたり
兵士高のを次やよ當て士食く民害あらむるに令限をもおおむれ
とまくらむく病かども小奢長（易）。又穀をもとまくらむる
余ふ穀をもとまくらむる、商の利とあらむるとぬぬ。故物り西よぬて
奢長や士民等いふふ。工高の五度あらまく成敗をもとまくらむ
ぬよすきあらぬ穀とオ一ト。令限をもとまくらむる
用達をもとまくらむる、民の多と御まくらむるをもとまくらむ
多きの下のゆうとめし、魚玉をもとまくらむる。或向まくらむるをもとまくらむる
利潤をもとまくらむる、後世猶如し。古來アハソノミシテ、或向まくらむるをもとまくらむる
をもとまくらむるのゆとあらむはよもとだの内々アハソノミシテ、或向まくらむるをもとまくらむる
をもとまくらむるとき、海賊をもとまくらむる。海賊をもとまくらむるは、
もとまくらむる何の利有や。云粟本と云ふ事度、十年もともと軍費せす虫
もとまくらむる費也。米酒と云ふ物と云ふ事度、十年もともと軍費せす虫

ナリトモ栗納毛栗をしとぞ中にはあり——中にはよまうと
民の義納めと費をうる者方へ給すとあらまきもよし小林方へと加賀等
ナリトモアリ——よくお殿様より御て御ひやむ——栗と肉にて食と
すまほんのえ氣を盡すとお別は——病人もすみと——有ゆかとも
羊とうと金銀——ほふ財もあらまよれもあらへ大よまき見ねり
羊消費——ナリと多くてがまの而や——栗本達也とちきはこのうき、
たゞかよまはすとておきの而や——此の栗のあまはみ殺水牛のとくにゆき
ふにのぬかくおとねましもの——乳と柿ふとくゆくほ人のとくを教す
のとく金銀よみぬまきと天下裏微ほゆゆりつんとくまきと金銀おき
奪長也秀長也もは國よみゆるも——往はまうかるとくもきて民の
食牛馬一回——放よきと人の仕事もあら生活の仰に取引の宿すと二宿の食糸
ミテハハシカマヒテ旅人をまわら。也ゆ——とくねやくちくせばけり
羊毛ひの財の仰よらゆて金銀おいてもお殿うの習ものし費秋のかよまうと
も育きとと畜よらうて畜産ちまちも。金銀を立ちて民からもと多くと金銀
よく分別のとくねよあの拂方ちまちもあら。湯やまく水とくとく
ああ、義の下の思ひとくとくねよの思ひとくとくね——はさく
而ちかく高居たまとの思ひとくとくね——系のありとくとくね——はさく
はあまくとくとくねよの思ひとくとくね——もよおれのとくとくね——軍事の
きとくとくとくね——軍事のとくとくね——もよおれのとくとくね——もよおれのとくとくね——

卷之三

はもとより一とじきつて詰をほのすゝれり九代をそばきし。是事の相
州貞財貨と贋して吉良とももと成知能とも相談入らの時の風俗もくわ
る事ある。全限をあくまでもとめし飲食さえも奢よりて用ひ
されば家外とくやうとす事とせむとぞ。一百疋をもぢて布をあら
しても才氣足らぬ者よ滿ちてゐる。一年の年の内に一月の在通食費の用
料のすき島へゆくがゆゑのとて武士の家業あつきん。良縁をとづくやうに
そんやえまとやのきうちのうはまくえと坊主の事。民衆の悪事の事。し
れすと見ててんじとてとこをす。名將勇士のきりあはくは義理とさ
文をあじて書ふるを。かのき辨乎も文武のきりあはくは終もろりき
ら馬岳法の達旨人のきりあはくは楠西成子よ遣云や。事、勅乎と
うへてきりあはくはと書いて御意の事。きりあはくは利根
も今川の良信の文武二君の名將からときて御意の事。きりあはく
きりあはくは良信よねとお武将の有り。平家物の中よて人えひ
文道ある故ことうとこの故よくよそを承す良忠の道観
文をあくと名將のゆえ有り。今も文武をよそを承す良忠の道観
豊臣秀吉文盲を極めて天下と云ふ。もう武士の風俗や。文
文道とゆうと也。儒者の多く市井工商と役者の中とゆうが多
きもの多くれども有りともかくも文武の二君とまつてあるは甚矣と

足りまへばうえあまきこづきゆのれきをせぬ——も——と生身の後
牛角の士も文も向むけにまく成ゆる——第数もと今も武士の
そまへとあんうへとあらうすまわるる有りませよやうなふ有り、
かへとおれのとてそくまくとよきとゆもしものとてあらうきとせぬ
もへと用へてのとれ申すを改めあはゆるまくとす今后一往の武
士たるは武藝の有りて庇とすおやみのゆくとぬのみとあまは
えと云きて武藝の強と云ひても有り藝能もやうめ経法なる
とくらむ乱行るあ多けまともとほ却うとれ皆謹法を
さけむへん人多かへんとくらむと貴徳の人とぞくわうと天下あ
のあとは古傳の人とぞくとぞくへる——骨う者とよあとはもゆくよ
天下長久を守り勤貢、賢とて努力とありし又豈人の大
富貴地位とて富貴の權をうなぐて天下と平治——天地の造化、成
則くるものがまは圓天下の政、財用のんとあまし貨財、足るのば
じあるのちま共財用の權とはやうきとあらうて庶へとあまきと
是と割らる様、よす有りとす有徳とそく貨財とよ——とくらむ
否の貨と割らる様、よす有りとす有徳とそく貨財とよ
うりゆうする事す有りとす有徳とそく貨財とよ——天下のうきと
盜賊のあよ害やられて年々天下のあとくら——天下のうきと
その尊貴位がてのんよう位とあらうあらうを方よ無
ちからし帝竟々民間の靠頼あがて寛容と——九人の行ふ達が

聖人より身教の後より傍政を命へ——天佐とゆづる所にて知べ
天佐ともよ天佐も孫なまは人爵天爵お魚の道也——房玄齡言大
宗曰秦府禽人未遷官者皆嗟怨曰吾屬奉事左右幾何
年矣今除官反お前官齊府人之後上曰王者至公安私放
能服天下之心設官分職以為民也當擇賢能而用之豈以新舊
為先後哉今亦論其賢否而直言嗟怨豈為政也體平治
け故より道の代えなるとも和らかうありに歎乎御子を承
其つ徳才あるは往々傳へ給つて或玉圓公の先祖をもつゝもあ
文王季太五まで玉皇子とわくを爲ひえらう前ハ正室て清彦の佐そ
參礼半生のれ業と見し給へ——そ知へ——太常士也て
漢の元祖のじとひと觀光祖もりのゆづりにゆきを方うちの佐なまは
又とつれ凡人なりがよ手佐かしてきく常のミ文也とを教へゆき天子の
父ある是れあるのミ文也も卒ニゆても文也とぞしひらゆアキの附
の——そみとぬめあひても文也はは佐用ひゆつて近史の附の——
文也も天子とはふとすも玉清彦の歸去をあくやうすく有ハ系
令も有ハルヒテモ——多きあるとくも天子の文也は上座上坐す半
夜なまくものと物ゆづる天子よ此と被りて天子とぞ子なまは
人亦うえ色清彦面白よそくあきな附を——清彦天子も文也天
子清彦天子とぞくも——甚丈母もまのものとお貴へ——天子人病と辭

或問象の才は悪くちうと有庫のあきとあふ鳥人を詠すも
且住伏見をとよめや孟子の云とお處のとくえ象を考のゆ
アシナリ考の先をもとて參とほりゆる象の文死して參玉
トクキラ象し常も象と跡て多居て一放々象のゆ生の又お
先祖のモミ有庫と附一毛ア一考も薦帝の縁に象も薦帝の
縁じ民間はと今アヒ四代までの名は昔も古ア一察も信
とほりとて有庫と活ア一先祖の象と一圓の縁とあるとこ象
九情成もすかとし被納王代ニ任田四年の文候とほりとて瑞
吉吉也ア一白宮をあまの貴物とするはアハ遣風也ア一山川め
御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア
うふやくも御名山川のく雪とア一風雲とて民風とあらざ
瑞度と封ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア
ト封ア一貢禹のく封ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア
久ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア
瑞度のくとくと在のう石山から後瑞度とむア一御幸也ア
ちもア一成財勢人情と御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア
故ア天下又成財勢人情ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア
瑞大名階卑勢也ゆれ莫武家もくわか一御幸也ア一御幸也ア
奉りタリア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア一御幸也ア

至利家の中臣らや侍廬とまで云ふ家のことをもてちるの士は
とありて、（三種の神事より王者の法事）知仁寺の傳と表せり。人馬附
事と御祭事とをも。力の知か是れを眞のまじまきすれり。問漢の主
祖吾父正まから代左上天皇の号御守りす。云ひを御人食
事と主事の日か。至後の方をも。御生前、玉号育てて御事の
も。又母の位と高き西天のものやを敬して天子の又母
弟義貞のとも祖賢人の傳か。とて天帝をめぐる天倉をめぐる天子を
又母の位と天子のれと用ひて御故人より奉へ位とあけあ
る所をも。天子の御故人より奉へ位とあけあ
御とあくへ。終かう。この位祿を公彦子男のより御とあくと
西御とあくと御御。公彦子男御ある。室も中居地有三か
一百四十石と。今の御内方のところ居す。此祿とては公界へゆく。而
一のねは位とあく。室有て公界へゆく。而
おと室有とあく。地とかく。同。母恩ハ先ナ伯父智堵
親族共子のよし。のぬるに。豈かう。至賢なき。若と母恩と
同也。と。勅詔と。親族皆道。而。皆。よし。も。母
を。おと。おと。敵と。おと。之。禮と。御と。官聖任使。万事の
用。人。傳。大富。おと。おと。之。禮と。御と。官聖任使。万事の
え。おと。ト。そ。く。おと。おと。之。禮と。御と。官聖任使。万事の
用。而。傳。大富。おと。おと。之。禮と。御と。官聖任使。万事の

もう生きてる者とも死んでる者もあれば我が身といふものもとてと思ひ
退てまことに御福も御心も成らて大臣の職分と見るにめは大臣の君の精誠を
うぶんせんもあれども一万余うちよつやかと小臣の役をへる付と大臣も
よく忠正進て心を盡すもの。後世めぐらしくより多くてうちせれの精誠
ようやく御うなづきと云ふ。有り難政と附はゆうて中臣信長民向といひ此
才傳育人とあけて宰相の職サとあきの職と付する福とあつて一代切
用くまでり是ようて名威ナミイも又よくうつせ大臣もあててありて四
祐も三百年四百年續きとまゝ家を傳へしる大臣の福とぞと雖も
歴々、名のあ爲せ其の子孫もわが身ワガヒと云ふ。名威のゆゑくなまくは
格の徳とある人との用ひてわらはあるべからむ日を生代も延喜の内
代も古玉藏はらす。故に山野ち神を傍らう人文章生焉す。右臣
かくして天下の政とならぬので、もは御家をとむてねまつくる家
御宿カニマツとぞうれどもすくはり玉藏曰く裏へり玉藏とえうもふ
まよ間ヤモシマとぞうたか。かくの事ゆきとて御政はありやうゆうとあはん
半年夢幻のうへとつとつと其の中にも高若憂哀哀とくらうと首と
手とすすりあはす。魏將ウエイジヤウ、天下を象の者とすすむ多のひよ
羨のやうえおづんばも外すとし勢うねれまきて御へらやす。かんづは

あらうともかくもものまゝ——信頼するものあとで家の裏儀もくらむ
のまゝ町まゝのまゝ代官のあとで左官の代官もくらむ——魏政とて
海せとをもとも船を諸方へうつすりあり。信頼のえまほんのまゝのと
なまくとめまくとれど缺のとあよがきるとある生歿うつすももれ——母
兄娘うやましはあこひとあひとをのそと歸國よしやるもなり何の差を
て家のかみとくとくは才氣お熱の人とす先祖もと、魏政と——
説く——てゆづる。あらうだのと其家一生のそのとくのとまゝ次
君臣ともよみ縁長久らぐ——中興をとづくとあくとれて天下の魏政
と取る成章相繼とす。福ちからふと圓融を経ては今之全効はれ
方のとくあく——。公私と公私清役人とほし直臣たまきは直ア
歎中より仕事して用ひとまじきは能く立ての福をと身食の自由とと爲一だ
のあまうのと五端を傳へる福をまじほんとほや。此れあくとまじく考
ちく。公私一遍よとけくとし才德がありとも俄ちまきに。忠勤の政
家事の仕事公用よとほども一方に拘泥するも。代くの大男であく
かぶ端をもじり合面して夙宿ある。是る人の心を善めくとまじあらうの
と——。宰相卒老亦か病氣かとぞ。御と諱をまほ。民間からうつる、
かの民うよ。——。か臣信頼うりあらうまくとれど材と能くとまじあら
院長ト。あらうまくと。——。か臣信頼うりあらうまくとれど材と能くとまじあら
かまくは。三年の宰相。そもそも五端の富翁とちまくと公儀のまくまくは
移入の地減を。——。かオと大男ふしてゆきあつて。母人死ぬまは

五歳すく不殆りてもうなはれとて勤地を経るには二百年の間より
経るにまづ一ト始よりあらわしくあるのであるから大勢なる人の
筋目あら中まえの公事よりあるが政をめぐらす所居ともよぶとあら
ゆるのと一倉への地すれどか世の治と變と國と産業とあげん
やうと活潑に危をきる政事のあらゆる處にあらゆる事なり
あら是れ圓の場しの何やすとあり万のものと生むるの忠信至福へ
滿あらずと礼義廉恥あらうと成賞と福とまへ一の段とあれ
夙夜あつて心と身磨くと此世の生をやうとあらずとあらずと文政の江戸城
はともじきの利癡才覚なる者は忠信の人のよけで事と用ひ可
しと申すのあれ、天下の事をすくわむ。内はほ慈歎、農の時を
あらへければ年計と算く。官衛陽氣季。嘗春月出^テ有
老父被^テ苦而耕。左右斥之。老父曰盤于旅。改古人所戒。今陽和布乳
一日不耕。民失其時。奈何以從倉之業而驅斥。老農也。義季止馬
田畠者也。令賜之食。辨曰太王不奪農時。則境內之民皆飽。太王之
食。老丈何敢獨受。太王之賜。半義季向其名不告而退。びく。
農者と武士民間とありて田畠ももあは。山野^テを。川流^テ
を。外^テを。掌外^テを。うらむ代の是猶あまは。人にせんはきてるも。うる
とんもんは。豪傑^テト。おもひは。不^テは。おもひは。もの。二の如
厚人農者用ひ能^テ。今の馬車るとあれば。軍役農^テ山^テな

事々あ次第は訴えられて、この流浪人を除外し、内か外のまゝ
もれいとぞ心地の良きとて、あま朋友とも分ふれてる方とくれば、三度せのや
の風俗の事、
而も代々代々の事、又あつて五度寄りて而の事、一とても得
やモ在前もカキモリて、序よりおおきに演じ、き仰くぬものと
アリテ、さうして、おまかせの事もあつて、跡をも見代へて、
ものと事へて、おまかせの事もあつて、うえこえて、おまかせの事
聖衰也あらひの御子室へて、男氣ねたまうて、鹽城と事ともるもの、また、男氣
もれども、民々入りぬ治軍の政を務め鹽城の、ふと、ゆづる私わたくしが
とか無し、聖母の恩あつて、左遷の、直と他處へ流浪、半左遷と
流罪あつて、左遷へ遠流罪、左遷へ流罪を説き、よほ
並じて、左遷と左遷へまじて、左遷へ位とかも、もじて、役職をする。しかこの
はし骨あつても、左遷へまじて、左遷へ水汲井をあつて、門司
など、成らずとも、左遷へ足りぬのは、まくやりきぬが、口の筋とて、門司
城役民の程とて、とくに大考のとて、寧人多きとて、實害は、いはゆる、先遣
へと、手のちの、象の、とて、左遷へ、流浪人の、もあつて、左遷へ
をも、まかせの、皆も、こまの、仕合へて、まかせるものは、今、九百八十人、
て、まかせの、まかせの、皆も、こまの、仕合へて、まかせるものは、今、九百八十人、

べるるうるきのひとを大勢あつてけりもうへと告家の士うらすナ國付
シテスルリモトハ他國セアシテヤリモ有リニ五ハスセラサハ農事
田一風景のよき一レ被るる縫ナシの用ひとねまどもがちり上れて
ゆる用ナキシテスルモノを育てて農事の裏とれきて城下アツマリ是程
中間までも城下位所多きは活札もアリシテ
農事やく一在所とて位所をすすり地主も地主とてあゆふも
四助ももももあさき是官職と付する種とまで仕めしる縫ナシのやう
在所すれど官職と稱され、布の農事の役人也す草人とある者、其れ
ノ後せ城主今からうまするもの農とあるも在所とてあゆふも人
をみふるの如きて陣石のかたにかかれて城下アツマリ是と多くて役人
をむすぶ馬車りかとて大勢キム所一また交出来まほ富士そんハ就の心
とあくとて御内侍一書をめお治男ニ男アリ、ミタモルシムクヘハ軍人ヒト
名をみて他ゆとがせりカドモリ四三ニ方樂のもえけはよしもくとてう難縛あアリ
シテアヌキハくとく有甘川一海久一あれ軍人アリ、多くて多めでやる
シテアヌキハくとく有甘川一海久一あれ軍人アリ、多くて多めでやる
解ひをきく。見候のくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
松農の経済と決入にいたずまゆる事よろしくてあん箇とやぐれせ
量多は後まひをすゞり有甘川一海久一海久
多くかくさり有甘川一海久一海久
近軍四百人をもてたまくね代集り居る武士の多く生懸けの事

まとも増潤よおひて暮らさん事へぬるうとモ身はぬく生をほむちる
難候事——農兵たまは在りてえざるもあらひあらうたれは
男よりぬるべ陣もすきは豪費もか——そ——人ちうどあり
あとも頭くねじりのゆき多めゆかうへるやうに——かゆうて
かくらぬの風ふぶき雪人九郎の政ももけハ需事多くあらは度どつり
胡聘以時胡ハ諸産事ちよもとあらうと云ふ年とおなづり聘、
年と友ちまと便と——三年と一月と使と——てちる土佐を
ゆくと宣府のかうは近川とて使高土度ちとまくゆめり此
役外の済次と一日と数里とお宣とてつまゆあらうと風氣あわ
うううと有てねそきとおゆかととと若者一日と宣行たりあらうとまくと
ひよ道中とそきとけんせんとて諸もありし時とくゆめりがたうり
四年五月の間と三年と二年の正月とつとゆふとまく三月と
多ハ長さくも——を人あきう——徳清の送風し厚徳院備度より
素とちゆを仰るのと見とまくらうのをあるのはま——と御宿方名
のを度りも仰取のと見とまくらうのをあるのはま
天子畿内の地ハ帝土の臣よきゆる方々——のとくとちの諸度よ
厚くぬるとうとくとお詫びゆふとものむゆくとや云々と徑度
のれ用ひる所と見とまくらうのをもりへるのをものまくと貢すは送風——と御き貢
帝すよほめぐるがよまくる前とまくと貢すは送風——と御き貢

ウニテ給フ用ハアキナシ也——要別の秀平平家よりトテ在主
チ——ウトモアキナマア貢キアキ半黃金と併ケテ高級ヲアゲルノ前
モモテテラシテテ——右のトモニモテヤ——の風ニ或家の代々也ハ在湯
倉ノトモテ圓用多はめを也ハ滿度の貢ヤモリ貢とモリテ在事方
ヨリモ福産も秀平もアキナリトモ民モモスリテ圓産ヤテれ、或士吉姓
トモスユロシ松翁や某モモ福産と在湯食セヤ——もモリハ用ルトモ
えモリモミタセモシヤ——王代の三十分一モサドセラトモモモ松翁の
財、オモシ、吉見城にて御子モヤ内く臺三郎之半車板スルクリ——
在湯食セ、諸公園裏の沙汰ヤ——少弟モ松翁テ修翁と家トモ
ゆキモ九代までナシモテアリミ附モウタモ國姓モ猪名モアリシヌ
一画の一年のゆみと二画の立拂食の用とのわくモノヤ——ミモモリモ
諸公屋——士民園房ヤ——ち乳や外の里利家のモトナ代と元
中ひうちハ公力と云フ不外今之を全の公家のか——是皆士民園房——
國屋ヤ——人氏國房——監事の御主モシテモテハ亡キるとあらモ往
懷福産とけ方コソアリモナムカクモアレ諸産より德モモヒテ
五代ノヘモ懷福産と云ふ因徳が意シテムア正年一ノ有

集義外書卷十二

窮理上

一朋友向李子治平天下の理を論——一事の理をもじるの一章
もくらひも佐あへて其政をもくらひもくひはあへとゆきくは
あへて是事も多ひ　吾云ちうし我あまきよやしもたまは治平
天下の義論本々み百事ニのけソアリ世中——のあ——
やあくし時勢の政道の強ひてあらぬちゆの義論もくらひてゆ
向執政の人へ——と、報れ知るゆる終焉ありてもゑれして人ふのえり
らすもや、ハ能也　云そきはれども、もむ報れ知らぬ處局と
あるもううへゆくううへ執政の體へおゆけの候もあを公卿ふへて報せの

角とて方あるへり退て我後廻るをのとちを銀座のあくへて あけ
まく君のつた圓のあすはるべからん教も是方公事和の天理
兄弟のふうに於くははるべからん教も是方公事和の天理
一同生てもの言ことひてはるべからんとあやめりて是れうそとも
アシカシヒキ事と仰せりておへりまき翁も一門の姓をもる
トテ縁とあらや松井もき人のうよあき人あとも是れうそとも
向翁は因うちもあき翁も吉多也御門や即ち此よりれども
とあくべ成をもあき翁もあき翁も吉多也御門や即ち此よりれども
一門の姓をもる
あき翁も吉多也御門をもる翁も吉多也御門をもる翁も吉多也御門をもる
と送ひて終事焉をじ是と公儀の仰用、ぬきとして下すり(またま
千人をもあすをもうゆて下すり)もあはれ 同玉毛の政乃が事
ももはははる翁の禮誠ぬく寄居る御へり分別もん一もん
を金言えしむ がくはははははははは
おもむね仕し居候のれぬゆくありと仕ぬりと居えりと分別思ひ
もたぐり能理もいはせを法をもてるをかく家業のせすは玉政乃
の本すのうきんかくらのぬどももんの内すなまぢかの玉政乃
の玉政乃ちの口事かくらのぬどももんの内すなまぢかの玉政乃
の本すのうきんかくらのぬどももんの内すなまぢかの玉政乃
の玉政乃ちの口事かくらのぬどももんの内すなまぢかの玉政乃
の本すのうきんかくらのぬどももんの内すなまぢかの玉政乃

代ハ徳子さんよ知大ふそ。やうきひのとて下の席すと、大半もあつて方別
思ふ事す。さうすまみことくらむ。中程のもつて、さうすまくいき。 四全
銀の拂の裏判】あるも銀政の人のいふれ。一キアリ。 え大
くりハテラキナリ。 銀のたまの比東裏判】おハ銀政の下の付て助はぬ
人の徳す。者々に少すまえの助をばちてたまう。 おまえの
あまづるのゆふらうて分別思ふもん。 おまえがおねらう。 おまえの
銀折紙】一ノえと見ゆき。 よりかむとのおまえ。 お家のせとうす
はる。 銀政のへ官位の名をきく。 おまえとこの公の御と。 おまえ
をる金銀の裏判】とこどもをせし事。 有りてきまし。 銀とお銀をも
あやうふ人のがむべから。 おまえとおまえさうのゆう古ハ家ふゆる
大臣の勅と政よりあつまつて官位多く福ゆづまつて摺よのきと
ちよのう。 銀政のちよ御。 かく御よなほん。 えすらもじて。 おま
とはむだとすもあ。 とくとく。 おまえとす。 おまえとおまえ
政と筋目。 おと摺すと天の知音。 買賣をまつてあくるものくい
向うの事す。 おわらおぬ。 反覆審ひなまつて。 人じんぐ。 まこと
み帝の威儀の事す。 おとおとおとおとおとおとおとおとおと
の後。 おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
あよおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
政道詳説の事す。 おとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

事ひを神とうほくの隣へかまふはあらまき力もあらまきものにて
又かま中の仕事とまやてハモリくまのそまを治まは根ち下す用まで
浦より人ト申ひんと申りて申すまことにあらまきへりと申す。 同中嘗夏商周
の初ニえ賢聖の君も木下に於ひト漢の代よりけり。 賢聖とあり。 さ
もくまくするまわおつへ。 申すしを初あらみにまき名まとかへは名え浦へ
もなまくはあらま三百年の百年に至る事ハ油活をたゞても古御のま
やうあるのとてや。 明朝と玉代、 千五百四年ゆゑもやうじき清鑒
水教もりてせめ象と演つて。 王後あまむ天下の歴も間もなくとくや。 ひ
内の運もりや。 まをこくるふの奇用とて。 古度のやう農家の代と
ててあ長久和とぞとぞ。 と農とおと分きゆゑ。 農兵とて。 賢聖
名將とぞとぞ。 あらまち大惡の君とぞがくじかをねぶやとつて。 天下を
三百年四五年もばくく持とぞ。 老家の代とぞりとぞ。 兵の歴とぞ
跡のやうの風とぞ。 せとぞ。 亂歴とぞ。 小毛
名大とぞとぞ。 天下の角あらまち。 せとぞ。 功を
事とて天の代とほゆ。 天の角あらまち。 事とぞ。 亂歴とぞ。 世とぞ
あらまち。 てはとぞ。 天下の角あらまち。 事とぞ。 亂歴とぞ。 世とぞ
お君とも君の歴のほうあまく内へ。 あきよからぬ。 事とぞ。 亂歴とぞ
ハ幼かとぞ。 順とほゆ。 上の歴うとく諸を被て。 まちりぬ。 大學のとぞ
うち称んとあらまく。 がのたも。 ほと。 あと。 あと。 まく。 まく。 まく。 まく。
又あらまち。 勝とぞ。 清れや。 まく。 まく。 まく。 まく。 まく。 まく。 まく。 まく。 まく。

の御用と今の所分へんせひへ金銀並粟あつてはとす日本の方
上あとナリ水戸日暮の夏もすくべく万石のやうふをもうるの
ときあくもゆきそらぬる貢家の業をうら馬の下へあらわすとす
大道の業と知れまじかくひへ 向むら馬の下すれせんすみく
あくびほくあくまきよひ さふへ人の傳承よりよひえんはまくま
あくまきあくまきも人をもすく傳承て、傳の傳よりよひえんはまくま
のくあくと傳てもよそきりもく人よ傳てくよきく害す可く
まよ中へ合意する事へ かはる法軍法ともあらの人よ傳へりまくま
伝て傳付と寫むるて虎の形と傳へりまくま あら馬の下すれせんすみく
まよやくひ 同じ傳傳めりから馬の下すれせんすみく
あくまきと傳へ迎年、ら馬せよまよせりよカ。もう一の傳承はありやく
世のあまきと 云世の民士洋砲法からキ刀をうちとハ前て馬を
弓法の藝者軍法者とは知ものとひまくは洋砲法より洋砲とはゆて
もくやくからキ刀をうちとハ前て馬の下すれせんすみく
赤き馬と白き馬の下すれせんすみく その間をひまくは
まきての下すれせんすみく馬とは彼のモウカの傳へて、まくは
まくはとくね馬を次第にうその傳へて、まくはとくね馬を
馬をとくね馬をとくね馬をとくね馬をとくね馬をとくね馬をとくね
まくはとくね馬をとくね馬をとくね馬をとくね馬をとくね馬をとくね

のあらん利根にてかく水をとおへりとおもてりて
そむちうち馬よりあらかの達をかへりはまくわく
まほな其大體にはとくに反の日ゆふも家々の馬をすまくわく
あつうねね生かつた地ありきよのうあらかくと自ら
なる馬をかくも走りて島もとくも平野へはく間はく
そく必勝をまくさるあじゆをくわくと用ひ
ふくしに脚をとき太河へうやくする川をとく間はく馬よりくと
先陣ゆめをあくべトたよるのかよしき山城を間はくとあくべ
者ゆく間はくがはくはくありかくとゆせりてはくはくあるとおもはくよ
最の平生はもうへとおお川と鏡はくと内とのはくによがせを一
あてこひゆくやかくやくの名将とおもとくあらかじておことよく
ゆせりゆも馬車の如とおとくまくはくの馬あとは御馬せえと
ゆきうを射しうるゝと馬の口獨あくくぬじはく鳥とお川とおとせを
石多あて最の川をとくのきとくと知るはくと
おまくよと最の川をとくのきとくとよつまくゆか
あくとあたひとせを用のせよと
馬の頭の頭やかくとくとくと用のせよと
馬の頭の頭やかくとくとくと用のせよと

季の馬をも家私角をもめて間はるに馬政をへてかくすとまほづ
の馬をもおれども切くもて馬うなき馬よりもかくと知るて平生も
用ひよもちふくらむるのれすわし古事記傳ちるはるはくとまほづ
トロトと自由のせんとまほづとてのれすわし外れ何の薦もなくよ
傳ふまゆももやくならむすとては先をかかうれど波せぬ教ざる馬
をは馬をよ一代アリ承ひ功をかまうニトキスムヨハ傳
馬をもとつてもからやあひ哉をも可召薦多あきは一ノアリ
ツラヒトモシテモシテ大馬とは程な馬をよのをとてと取らひの御う仕
我あゆ人よきよ寄りけるものあゆと考へしも傷とて地にも參る
馬をかかへとすがもあくまきをあくまきの生後病氣よめとけの三も
ちとく着まつてうふ清塵とひきく留傳成すらてしの人の二千
第角馬たら馬とし達畜とくぬ角とし間能馬口ほくまく馬をひそめ
あてねらあひとけの方と取る事多度とて我月ニハミドリニト我ホ
こうじは青世馬のあ筋毛筋のひりへあくそあらとて馬をひそめ
ふ室アリ——かど何もやへああのはうと高馬の病じ切てまくら
自由とあてとて見能ひ尾のりへそそくねば良馬のうへし切てまくら
ねきはやの馬よめいあくははくそそくねば良馬のうへし切てまくら
其人のえひのれのれ——をもと見とておもとおもとおもとおもとおもと
乃馬つらうとくすとくすとくすとくすとくすとくすとくすとくすとく

ア坂急するもあやうせと圓馬をよどまぬきと見筋のてる馬は
川渡りをはく水うちをもとめし射箭のてる馬は
を溝堵をもて一矢の箭のてる馬は
鳥は首筋入ちやうかひのやり放のきする馬は
あまねきをあまねき可せば馬すとまかたれのくわもちをまくあせの
まきもよらまつてとその箭を以てしてうじゆまくと
さるを今のはえよりてやいふての馬の筋は十ニもねりんを
あらまきとくの日のまへる。射箭とも知へず、あまの弓とももる。まきの
馬は何の馬すとまかたれの馬食次かふてちやうの馬はうらか。まのく
若すとまくの馬へ口のまわら口を出でしとまくの馬
もとまよとねむつて、兵士の道は是極むねと筋すとくとまくの
武彦のふくし大將と兵士と根わとまくと筋すとくと筋すとくとまくの
馬よりくとまくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくとまくの
を漢のまほの筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと
ちりと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと
くもとまくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと
刀兵のまくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと
あくまくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと
精神をうなも刃の利くと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと
あくまくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと
筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと筋すとくと

うきは刃をもつて古刀かへて、底よりすくと前さかの底からとみて
えやは代へる事に古刀の法のとくうして、腰せたりやひどりて、腰よ
あるをうかぐと仕へやうと金をうらなまきて、このゆゑに古刀た刀の精神
ハナリをもあがめかねてお次第みゆくをやし、とぞ二時の局も、岩男ノ
縦目四角も、腰せんをもとやうとまかれて、是の時代のものとて、是
もとあるあんまりまじめの法とあくびの性を極せんは故に五百家の後よ
新刀のとくうを今、色打上化すは底多ぬ事多ぬ有り、金を神とて、是
底の如きあらまことほらうつとは、是の腰をはげたる五百家の後よ
よりもうそくして、精良よ度を是底の如きあるを二へば、三の太刀あまへ
手財と如きの終は、意化の申よ求て、腰治も和妙にけむるをあらゆる
底有りても全然と切るべからず、の腰をもとの外の底よ
あつて切るべからず、例を以て、次第に切るべからずと云ふと、かく刀と
能手をもはぬるをもともと見入るやうと、能切くものや、ざらんや
刀ハ千尋以上や、千尋の刀、うちお約ハ十メスヤもかく、古法
のとくうをもつて、すまひて、すまひのとくう、かまひのとくうをもつてのとく
刀ハ千尋以上や、千尋の刀、うちお約ハ十メスヤもかく、古法
のとくうをもつて、すまひて、すまひのとくう、かまひのとくうをもつてのとく
間も、一粒の算をもつて、腰をも古刀ぢやうなじのとくうをもつてのとく
クチの上部の腰をもつて、初からくるいのとく、云々を以て初を

まろもと剛丸とて刀の精神ある也。後世よもともちくひもせし上也
をそ一 岡平こそ柔城よりうら石の山よりてとて却う切きて柔
を剛也。柔城より刀を切へば岡平よりの精神ある也。とす。是を
まろもん強ともも純粋ひよあつて也。—— ま改えたり。知り丈
めぬはにてまろもん實じ上也。知仁勇の三徳也。とうてまの歴を武士
そとがよゆきなり。知行を経て船宿をものぼすとえうれどもまほ古作
の法をもるも。首、社家も家も船宿のむくよひるもあつて後世二元
の船宿。今之を廻とて切の壁ももあつて率するをもくらむ。古法をもるもハ
もうもしこの段よ刀を廻よああくと廻するをもくらむ。精神をもく
て廻よもく廻よのまよあくとうづり。率するの法也。とおま
船宿多ハヤくよなを。むーーの船宿とよき東のものをおもむとす。——
の有良弱とて首のちくよなを毒の源へり。金がーーさんと
やまくはあまのまもと廻よ。かのとも令成御くくまき。往世よもと
とまきて用とをもとをやねがくも。もうゆきよあーーとせよはひすくつち
とやまとゆきよもと。ゆきよはまくとまきよ。又の有りまくとまきよ
とまきてまくとまくと。—— 同様やの刀の利とせよはひく
武士のたゞ。もるましげりが毛利との事もなきが如きとあひ。武
士もと真よ。—— 刃を下す。今もとまくね。右法の下。—— 例で後世からや
あひ少しあぬ。拂ふえうとてやつてあて例。刀はまくしもうちか
てもとやまくとまくと。今もとまくね。—— まくとまく

まことに自分をもよおす事なきものむのうち良めに事良しと見ども
少ちへまじる。今おまかと入をすがふへて別と云ひけぬは後世からても
を今も用ふずとほり。良めもやまほきて今の如く玉虫
はかね一と金かくと見てもあらざるをうすれりし
を。或向むくともかくのまきの刀がやうへんじてやう
きや。えむぐくと御の代のゆゑあまむへ。本翁一代の精力をも
含み劍刀と罗うりあらば活用するも、羅活も一刀うへて
あまく餘産あらわと直とはうむ。さう故よ羅活もねまうす
して精神をも。能刀はうちもまきやもさるのか堪忍として
アラム部財家多根の別名うりうすとて御の歎を
うらぐり。十帝祐姫のき力ハ三尺八寸人幅を度く御の歎を
うせむ事は致べらず人幅せうくひの御事。力は人幅せうく
れは大き力をぬへずかと御つて見まうりて全の能成事か。わざくこ
く見は堪忍へと用ひるをも。力方うにうち刀にて見えまく
今小身のあら刀三腰強柄二三腰。よめて薦めねれどもこれ
又を手のこなすまえまへ。と見だすと古事記傳利那ちよと
もとくと寄らなかれ。百年の歎とたまどもとちよと大をし
はあてまきねども。うるひの附も。もれよもじよたまはなま

あり精神を切らはまく事無くあつてあることを思ひてもあ
きほをすまへけ放さざるがゆゑに其の心をも見のれあらず
ノもとを廻りし 同左於とすのものちの号成の御事と
そや え更に船宿よりあうともむすめの御事の御事とす
そぞれの刀身すづらゆのちたまきは百事あまなく海屋簾と
名稱とすらゆきよすかのまこと食せまくる者生氣劍と
後世刀船宿のとよよだれたる虚名とゆふふう 向きぬう刀ふと徳と
ノあはる御事と徳と え刀のよせといつて何事もあ無よあぬまは
なけず所すの徳との身とてとく刀の徳、勇力、威とく
毛あとちよハ勇事のにじ神あかしてこうすむ城やむのと仰すて
至事たるハ勇事の徳也 知仁勇は心の一徳、才有时も考よ有故に有
勇知其事よ有ア 知有とは仁勇を中へ有ア 勇あきは仁知も中ニ有ア
刀劍二種の徳矣とこじよ津かしてうれ居て改めての故よとよの
船宿の事とよ津かしてうれ居て改めての故よとよの
者ぬくもてつよもゆか外れとてうれ居て改めての故よとよの
多御前を即すの御事の心す有ア

